

萬福寺の行事はどなたでも参加できます。



献供 (けんぐ)



お身拭い



ご焼香する参列者

思 いがけない師走の総選挙となった12月14日(日)、冬晴れの寒さ厳しきなか午前11時から本堂で御本尊阿弥陀如来三尊仏の沐浴式・御開帳が行われました。護持会役員、檀信徒の皆様が出席するなか、検査入院中の安本利正住職様に代わって由道副住職様が式師を勤められ、御開帳、お身拭いの儀式が滞りなく執り行われました。

本尊阿弥陀如来三尊仏の沐浴式・御開帳

平成26年12月14日(日)

初めてお身拭い供養を経験された安本由道副住職様は式後、「昨年、住職も申しておりましたが、何百年も昔から代々守り伝えてきた、まさに荘厳極まる、壮大な御本尊様の御身をおぬぐい致しますと、その重責に身が引き締まります。本堂に今、大切なことを仰せつかったいのだと実感しました。その気持ち忘れずに護持会、檀信徒の皆様とともに歩み、精進してまいります。ご高配のほど賜りますようお願い申し上げます」と挨拶されました。

この後、お身拭いたきれ(布)を小さく切って参詣者に分けたという故事にならい、ご供養された浄巾(タオル)が参詣者に配られました。

12 月31日午後11時から今年1年の感謝を込めて歳末諷経が、引き続き正月の法要、大般若会御祈禱が執り行われました。「大般若経」全600巻の中心となる「理趣分経」を安本由道御導師様が読経されるなか、「大般若経」20巻の転読が行われ、今年1年の無病息災、祈願成就が御祈禱されました。

その後行われた恒例の鐘つきには400人を超える参詣者が訪れ、それぞれの思いを込めて鐘をつきました。参詣者にはお寺で前日から準備された豚汁などが振る舞われ、順番を待つ参詣者の皆



参詣者の背中を「理趣分経」でたたいて厄を払う御導師様(左)

除夜の鐘つき 正月大般若会御祈禱

平成26年12月31日(水)
平成27年1月1日(木)



年を越して寒さが増し、あたたかい豚汁・甘酒は大好評

様の身も心も温めていました。午前2時過ぎには無事終了、馬込の新年が静かに明けていきました。なお、正月大般若会御祈禱は2日、3日にも行われました。

磨墨塚を寄進する心

萬福寺住職 安本利正

磨墨塚は南馬込三丁目、白田坂上の道の東側にあって、古くから金子家が護持してきましたが、広大な屋敷も分割して都市化され、現家族の田中千恵子氏、内麻夕美氏、金子敏夫氏、金子共子氏の四氏は、将来の磨墨塚をいかに保存するか再々思考し熟慮の結果、「現状のまま共同して萬福寺に寄付し、永久保存を願うことが、遠古からのご先祖様方の願望を成就する最善の報恩であると存じた次第です」と申しでられ、平成二十六年十二月五日にこれを拝受しましたので、ここに皆様にお知らせする次第です。

名馬磨墨の回顧

鎌倉時代初期の寿永三年正月(八三一年前)、京都で反乱を続ける木曾義仲を追討するため鎌倉幕府は源範頼と源義経を大将として義仲追討軍を発した。範頼は名馬月輪を所有し、義経は青海波、畠山重忠は秩父鹿毛、和田義盛は白波、梶原景季は名馬を持っていなかった。將軍源頼朝は池月と磨墨を所有していた。景季は頼朝の出陣の命を受けたので、名馬池月を乞うたところ、頼朝は静かに諭し「範頼をはじめこの馬を所望する者は多く、皆与えざりき」、そして磨墨を預け賜う。景季謹然として出づ。

その翌日に佐々木高綱が近江より馳せ来たる。頼朝は「此の頃は近江に有りと聞きつるに、何とぞ其の地より出陣せざるぞ」、高綱はつと頭を下げて曰く「今一度見参にも入り、御下知を蒙らばやと急ぎ馳せ参じたるが、道中三日馬損じ

て物の用にも立たず、あわれ御料馬を下し賜へ」。頼朝は池月を引かせ賜う、高綱平伏すると「その馬は梶原源太景季が所望せしが、与えざりし物ぞ、よくよく心得て候うべき」。高綱それを聞いて益々感激す。

諸軍はすでに前夜出発す。高綱急ぎて後を追う。諸軍は進んで駿河国浮島ヶ原(静岡県沼津市西端)に到る。景季は馬を丘山に立てて諸將の乗馬を望み見る。範頼の月輪、義経の青海波、それぞれ駿馬なれども磨墨には及ばずと見えたり。景季は優越揚々として得意であった。その時、後方より高く嘶く声あり、二声三声、畠山重忠それを聞いて「正しく池月の声ぞ」、景季それを聞いて驚いて気色動く。重忠は高きに登り見れば、佐々木高綱なりと号ぶ。

佐々木に賜る程ならば、何で景季にこそ賜うべけれ、景季に賜わらじて、何で佐々木に賜うことこそ奇怪なり。

高綱それを聞いて答えを思いつく。「これには仔細候あり、我が馬を損じて御馬を所望したが、すでに磨墨は御身に賜わられて見えず、池月は誰にも賜わらず、然れば高綱などに賜わること無しと、あきらかに盗み取り来たるが候なり、若し後日御勘氣を蒙らば、御辺高綱のために御詫びし玉へかし」と誠にやかに告ぐれば、景季それを聞いて漫心の気色やわらいで「さらば我も盗みたらんものを」と打ち笑いつつ共に連れ立って西へ向った。範頼は三万余騎、義経二万五千余騎、義経馬を宇治川の河畔に進めて発令す。河辺に二騎あり、前は梶原景季、後ろは佐々木高綱、共に流れを切って進む、河中に流す縄や妨害を切って進むと、後方

より高綱呼びかける「梶原殿、御馬の腹帯ゆるみたり」、景季見れば果してゆるんだり、弓を口にぐわえて締め直す、高綱駆け進みて先に進む、扱は謀られたか、畠山重忠それを見て、先登第一は高綱、第二は景季なり、と大音声に呼びわたりたり。

以上は、源平盛衰記の記述に従って書いたものです。この宇治川先陣争いは、日本の騎馬戦上で最高の事蹟として伝承され、それ以後には「馬くらべ」の言葉が生まれて、磨墨は我が国第一の名馬と尊称されるようになった。

梶原家の盛衰

この宇治川先陣争いは鎌倉幕府開幕後五年のこと、今から八三一年前であるが、その翌年の寿永四年には平家を全滅させた大乱の時代であった。その戦勝記録は梶原景時(景季の父)が書状に書いて鎌倉の頼朝へ報告した。連戦連勝に頼朝は喜んだが、多勢の武將の中には記録に漏れたり誤報されたりして怨む武將も多かった。その代表は義経であろう。常に戦法が違っていた。景時は頼朝に仕えて十八年間は優雅な生活が続いたが、頼朝が急死すると、景時に攻撃が集中し、頼朝没後十ヶ月に幕府の武將六十六人の連判状が差し出され、梶原家は鎌倉を追われ相模国一之宮へ移った。翌年正月十九日夜に京都へ向って密かに出発したが、二十日夜に駿河国狐ヶ崎(静岡県清水市西端)にて一族五十人が全滅した。しかし、女房子供は実家へ逃れて育成され、約二十年後には成人して鎌倉幕府の北条氏に仕えることになった。

梶原景季の長男は梶原三郎景望と称して承久の変に鎌倉幕府軍として参戦し功を上げたことから承久三年に武蔵国荏原

郡大井村に領地を給付されて、大井梶原家を創設し、大井丸山に萬福寺を建立し、先祖の梶原平三景時を開基として先祖の威徳を尊崇した。先祖の霊を敬って開基に仰えることを勧請開基と称している。

景望の長男景俊は大井梶原氏第二代を継ぎ、三男の景氏が大井梶原氏第三代を継いでいる。景氏は建長年間に馬籠(今の馬込町)に梶原家先祖代々の墓を建て、墓前に阿弥陀堂を建立した。今より七六〇年前のこと、鎌倉の建長寺は建長元年の創建ですから建長寺と同年限の阿弥陀堂建立と記憶するとよく覚えられます。この阿弥陀堂の本尊は金銅の鑄造仏であり、現存しています。大田区の文化財調査の結果、鎌倉時代中期の作品で建長年間の鑄造で間違いないことが判明しました。それより約七〇年後の元応二年に大井丸山の萬福寺が火災で全焼した。そこで寺を馬籠の阿弥陀堂へ移し、大井梶原家の屋敷も馬込村へ移している。これは大井梶原氏第六代の梶原景嗣が、馬込村の人達に絶大な信頼を受けていたのである。馬込村の人達は梶原家との交流を最高の栄誉と感激していた実情が推察されます。

梶原氏は鎌倉時代初期には鎌倉郡内に居住し、江戸の馬込に居住したのは六九五年前であり、磨墨塚もそれ以後に成立したものであり、梶原家の馬でも農家の馬でも黒毛の駿馬があれば磨墨と襲名し、それが老死すれば塚を築いて磨墨塚と呼んだことは当然なことと思われる。また、その塚を磨墨塚と呼んだのは、遠い先祖の名馬、宇治川先陣争いの物語を思い八三一年前を偲ぶ信仰の深さである。毎年正月二十日には梶原軍の滅亡を偲んで参拝したことでしょう。(以下、次号へ続く)